

昭和42年11月14日 第四種郵便物認可
平成6年12月20日発行(毎月1回20日発行)
物性研究 第63巻 第3号

ISSN 0525-2997

vol.63 no.3

物性研究

1994 / 12

1. 本誌は、物性の研究を共同で促進するため、研究者がその研究・意見を自由に発表し討議しあい、また、研究に関連した情報を交換しあうことを目的として、毎月1回編集・刊行されます。掲載内容は、研究論文、研究会・国際会議などの報告、講義ノート、特別寄稿、研究に関連した諸問題についての意見などです。
2. 本誌に投稿された論文については、原則として審査は行ないません。但し、編集委員会で本誌への掲載が不相当と判断された場合には、改訂を求めること、または掲載をお断りすることがあります。
3. 本誌の掲載論文を他の学術雑誌に引用するときは、著者の承諾を得た上で、**private communication** 扱いにして下さい。

原稿作成要領

1. 原稿は2部（オリジナル原稿及びコピー）提出して下さい。
2. 別刷ご希望の方は、投稿の際に50部以上10部単位で、必要部数、別刷送付先、請求先を明記の上、お申し込み下さい。
3. **ワープロ原稿の場合**

ワープロ原稿を歓迎します。原則として写真製版でそのまま印刷されますので、以下の点に注意して原稿を作成して下さい。（特に希望される場合には、こちらでタイプし直すことも可能ですが、経費の節約のため、できるだけ写真製版できる原稿をお願いします。）

 - 1) 用紙はB 5 または A 4 を縦に使用。（印刷はB 5 になります。）
 - 2) マージンは、上下あわせて約4.5cm、左右あわせて約4 cm。
 - 3) 1 ページに本文34行、1 行に全角文字で42字。
 - 4) 第1 ページは、タイトルはセンタリング、所属・氏名は右寄せにして、余白を十分にとって下さい。
 - 5) 図や表は、本文中の該当箇所に貼り込み、図の下にキャプションを付けて下さい。
 - 6) 体裁については、上記は一応の目安ですので、多少の違いがあってもかまいません。
4. **手書き原稿の場合**
 - 1) 原稿は400字詰原稿用紙に丁寧に書いて下さい。
 - 2) 数式は大きく明瞭に書き、1 行におさまらない場合の改行箇所を赤で指定して下さい。
 - 3) 数式、記号の書き方は、Progress, Journal の投稿規定に準じ、立体(□)、イタリック(⓪)、ゴシック(Ⓔ)、ギリシャ文字(γ)、花文字、大文字、小文字などを赤で指定して下さい。本誌は立体を基本としてタイプされますので、式にも必ず、イタリック、立体を指示して下さい。また、著者校正はありませんので、特に区別しにくい文字や記号なども赤で指定して下さい。
 - 4) 図は写真製版できるもの（こちらではトレースはいたしません。）を図の説明と共に論文末尾に揃え、図を入れるべき位置を本文の欄外に赤で指定して下さい。

議 事 録

第8回物性専門委員会(第15期)議事録

日時 1994年1月20日(木) 13:00-17:00

出席者 伊達 宗行 安藤 恒也 石井武比古 遠藤 裕久 遠藤 康夫
 勝木 渥 川村 清 国府田隆夫 小林 俊一 小松原武美
 竹内 伸 張 紀久夫 長岡 洋介 中嶋 貞雄 藤田 敏三
 安岡 弘志

[前回議事録の承認] 前回(第7回)議事録を承認した。

[報告]

1. 学術会議報告(中嶋)

○物理学将来計画の報告書は題名を「日本の物理学の明日への展望」と変更することにし、現在執筆作業が進行中である。本体は160ページ程度になる予定である。7月にまとめる予定だったが、予算上の都合で早める必要が出た。第4部会、運営審議会の承認を経て、4月上旬に学術会議報告として出す予定であり、市販の途も考えている。時間的制約があり不備なものとなるが、今後5年に一回くらいずつ続編を出したらどうかと考えている。他に運営審議会用のアブストラクトを作るが、これは中嶋が執筆する。

物性専門委員会提案のネットワーク構想、原子核専門委員会提案のアジア地域のセンター構想、さらに、大型ハドロン計画からLinear colliderまでを組織的に論じたい。

○数理科学国際研究所については、名前をせまくとられそうであるが、名称はこのままにしておくことになった。数学を共通にした人文系も含む研究所であることを強調したい。連合部会で4部案を披露することになった。最終的には学術会議総会から勧告として出さるものと思われる。

○国際貢献特別委員会は、新システム構想について、外部と個別に懇談中である。一般論より具体的議論から説きおこした方がアピーリングだと思う。

○伊達会員が執筆した「官僚機構と研究」のレポートは第4常置委員会へ行った。

以上の報告にもとづいて以下の質疑・討論があった。

○物理学将来計画の報告を今後も5年ごとにくりかえすという提案は大変良い。

○学術会議会員が大きく変わるときにレポートがまとまるのは良い。

2. 物性研究所報告(竹内)

○人事 新所員3名の人事がまもなく決定する。所内昇格もまもなく決定される。

○予算については内示がおくれているため、報告すべきことがない。

○移転関係については、柏キャンパスのアカデミックプランの検討が進行中で4研究科構想はほぼ決定された。平成7年度に土地を取得する予定である。柏には学際的研究科を作ることになっているが、キャンパスの理念などの文書の作成はこれからである。

3. 基礎物理学研究所報告（長岡）

前回の会議以降とくに新しいことはない。

4. 高エネルギー研究所報告

（石井）すべて順調にしている。

（遠藤）新研究機構を考えるワークショップが12月中ごろに開かれ、その結果を1月中頃原子核研究所・KEK連絡会に報告する。ブースター利用施設はハドロン研究所に入る。大型ハドロン計画とのつながりを考慮中である。

（伊達）評価委員会が設置され、評価が始まった。フォトンファクトリーを含む活動の評価が進行中である。

5. 物性グループ（長岡）

○物性研究所共同利用施設専門委員の選挙を行った。結果は次の通りである。

保志 賢介	佐藤 正俊	高島 敏郎	藤田 敏三	都 福仁
黒田 義浩	溝口 正	高山 一		

これについては、翌日の本会議にはかり学術会議から推薦することになった。

○基研研究部員の選挙結果の報告

城 健男	斯波 弘行	広岡 繁	張 紀久夫	黒田 義浩
------	-------	------	-------	-------

○物性グループメンバーの再登録と百人委員の確定作業を行いつつある。1月14日現在、これまでの279グループ中216グループが再登録を完了した。また31グループが新規登録を行った。近々に締切り、物性委員会委員選挙を4月上旬までに行う予定である。百人委員300人近くは事務局報で公表する。新委員長決定後、幹事を決定する。幹事の一人を事務局長にする。

6. 科学技術会議第20号諮問に関して（伊達）

○若年人口が激減すると同時に、理科離れ、物理離れがおきている。それに対処するために、科学技術会議人材部会が第20号答申に向けて検討を開始した。初等中等教育を含め、

理科教育における多くの問題点を述べておきたいと思い、人材部会に要望と提案をしてきた。教員養成大学の理科教員の養成法を変える必要も強調しておいた。物理離れ、理科離れの対策を学会内外で広く考えて行く必要がある。

なお、これに関して現在、東大理学部が世話をして「理学部とはなにか」ということを知ってもらうための高校生向けのパンフレットを作成中であるという報告があった。

[議事]

1. 物性研究拠点整備計画

長岡物性将来計画ワーキンググループ委員長より拠点整備計画案について以下のような説明があった。

計画案については、小松原、深井、家、安岡の4氏を執筆委員に委嘱したが、この部分は未完成である。計画案概要は次のとおりである。

I. 序論。

II. 推進の方向：全国1ヶ所の大型設備を置き、さらに数ヶ所に中型設備を置く。他に多数の小型設備もあると思うが、ここでは中型設備に限ってとり上げる。

III. 中型設備装置とは次のようなもの等をいい、それに対してはネットワークを構築する。
極限物性、多重極限（低温・高磁場・超高圧）、光物性・レーザ分光、X線磁気散乱、特殊物質形成装置大洗のウラン施設、物性研の物質評価

IV. 物性研の役割：先導的研究所としての役割を付加する。

V. 具体的施策：各中型設備のランニングコストの支援を共同利用予算として要求する。
ネットワークとして研究者の組織を構築し、共同利用が出来る体制を作る。具体的には、「物性研究連絡会」を物性専門委員会の下におく。これは本ワーキンググループがおかれていた位置であるが、研究計画を議論する機能ももたせる。

以上の案に対して、午前中のワーキンググループで次のような意見が出た。

○Iの中で非平衡等などの新しい分野が生まれてきたことを指摘すべきである。また、後継者養成にも触れるのがよい。

○整備計画全体の経費について、現在の研究の続行と新しい分野とどう関連するか。

つづいて小松原氏から、以下のような補足説明があった。

本計画の骨子は、各分野の方の意見をうかがってまとめた。極限物性について物性研が超低温・超高圧・強磁場の3つを組み合わせる方針を修正したので、外部の極限物性施設をも含めて考えた。たとえば、強磁場の拠点としては阪大、物性研、東北大が、超高圧の拠点としては、物性研その他などが浮かんでくる。光関連では大学は遅れているし、他省庁においつけという意見がある。X線磁気散乱はSRを使うので大型装置かもしれないが将来性ありということで書き込む。

各拠点は装置が中心だが超ウラン施設は、試料を作って外に持ち出さず測定するという

ための拠点が必要である。

装置を総括し、整備する体制作りが必要である。原料の高純度化も拠点化が必要かも知れない。

なお小型装置についても各研究機関の装置を生かすために科研費終了後のメンテナンス等のバックアップ体制は必要だろう。

以上の報告につづき、以下のような意見交換があった。

○まず画期的作業に感謝する。5月時点にとりまとめ、報告したい。

○物性から出てくる文書は書き方が内向き、クロウト向きで、自閉症的極限思考が見られる。

○環境学はまだ現象学の域にとどまっている。環境の理論的認識は物理学（物理学、エントロピー概念）によってのみ可能であり、その点でも物理学の有効性を主張すべきである。

○この報告は拠点整備計画の前段階であろうが、内容は専門家にわかってもらえばよいのか、他分野の人にもわかってもらいたいのか。

○到達性についても書いてほしい。例えばアメリカでは80T定常磁場の計画で NMRを使って抗原抗体反応の時間分解ができるというようなことも書いている。

○何をどこまで用意すれば何が出来るかをはっきり書いてほしい。米国の書類にはそこまで書いてある。

○たとえば、光なら物質合成、プロセッシング、加工技術、キャラクタリゼーションがあるが、日本の計画は、キャラクタリゼーションのごく一部にタガをはめる程度である。SRの場合、外国ではビールの構造解析など生命科学に役に立つというふれこみもあるのに、日本は、結晶にとどまっている

○それは、われわれが言うべきか生命の人が言うべきか。

○各拠点の位置づけは one of themか、leader of・・・か。

○物性研は産業界から注目されているか。

○自然発生的研究を押さえてはいけませんが物性は他分野に比べ組織化が未熟である。装置群による切り込みも必要だが、研究領域毎のソフト面でのネットワーク作りも必要ではなかろうか。

○21世紀のおもしろい研究テーマの議論がない。

○装置群による切り込みは今期のコンセンサスとしよう。その中で何をめざすかということとは個人の問題でもある。

○この報告を文部省に読んでもらうとすると、文部省に装置名を書いても仕方がないのではないか。

○他分野は装置名をいうのに物性はそれを言わないので「例えば何がほしいか」は教えて

おいてほしいという要望が文部省にはある。

- ソフトについては連絡会しかないのは片手落ちではないか。たとえば教育という視点がない。
- これがないとダメになるぞというものがない。
- キーワードを流布するためにも、この文書が外に出ていくことが必要である。
- いま欲しいものがわかってもらえればよい。
- 教育は来期の重要な課題になるだろう。
- 物性の中でこれだけまとまっただけで大進歩である。

以上の議論の後、今後の手続きについて長岡委員より次のような発言があり了承された。

本日の議論を参考に書き直し、ワーキンググループのメンバーに見せ、物性専門委員に見ていただき、第2次案を物性グループに公表したい。具体的には、九州での物理学会でインフォーマルミーティングを開き、物性グループのメンバーに相談して意見を聞きたい。

2. 大型施設に関する将来計画WG報告（伊達）

13期に長文のレポートが出て、「物性研だより」の1988年9月号に掲載された。その後、大学の貧困化により、SPring-8を除き予想された進行がなかった。そこで、今回はフォローアップ以外出来ないなので、これまでの報告の続論という形で報告したい。SR計画については物性研および各地の中型のもの、さらにSPring-8の利用を含めて、石井委員に原案の執筆を依頼した。パルス中性子については遠藤委員に起草を依頼した。これは、大型ハドロン計画の一部だったが、同計画が十数年日の目を見ないうちに諸外国に水を開けられている。なお、原研は大強度陽子加速器計画をもっている。これは、オメガ計画とよばれる核廃棄物処理計画の中にあり、JT-60や高温ガス炉に目途がついたのちはじまるだろう。ビームの一部が使えるので、中性子、中間子はこちらの方に動きそうである。

以上の報告に続いて、現状について、石井、遠藤両委員から報告があり、インフォーマルな討論を行った。

以上

第9回物性専門委員会（第15期）議事録

日時 1994年6月23日（木） 13:00-17:00

出席者 石井武比古 遠藤 康夫 興地 斐男 勝木 渥 川村 清
国府田隆夫 小林 俊一 小松原武美 竹内 伸 張 紀久夫
長岡 洋介 中嶋 貞雄 藤田 敏三 目方 守 安岡 弘志

[前回議事録の承認] 前回（第8回）議事録を承認した。

[報告]

1. 学術会議報告（中嶋）

- 物研連報告「日本の物理学の展望」が出来上がった。
- 第118総会は5月に開かれた。第4部関係では「数理科学の新しい方式の国際研究所」の設立の提言がとりまとめられたのでそれが提案される。総会で満場一致で可決されれば政府へ建議される。その他、女性研究者をふやすべきだということや、公的機関の情報公開が議論されるだろう。
- 内規の改正が議論されている。
研連メンバーの任期を3期9年までとすることが決まった。ただし、例外として
 - (1) 会員
 - (2) 国際学術団体の執行委員
(例. IUPAP各コミッションメンバー)
 - (3) 余人をもって代え難い者については研連から会長に申し出ることによってこれを超えることができる。ただし、第16期は過渡期に当たるので柔軟に対応する。
- 科研費の新項目を募集中である。
- 化研連からサイエンスミュージアム設立の要望がでた。物研連も共同で提案することになった。これについては、物研連の会議を開いているひまがなかったので、アンケートで委員の意見を聞いたところ、60%の回答があり、全員が可であった。
- 申し送り事項（第4部）
 - 科学教育の振興策、研連の再編成とくに地球科学などの定員見直しを申し送る。
- 各専門委員会で第15期の研連活動をまとめて、学会誌などに報告してほしい。
- IUPAPの強化について物研連からも提案してほしい。
- 国際学術協力についても具体案をとりまとめてほしい。
- 日本におけるpure physicsとapplied physicsの関係を改善する方策を考えてほしい。
たとえば、第16期に物研連メンバーとして応用物理学会からの推薦委員も入れるよう

にしてはどうだろうか。

2. 物性研究所報告（竹内）

- 人事 新所長として竹内伸が再選された（2月）。新所員として上田（理論）、高木（凝縮系）、松下（中性子）の3名が決まった。所内昇格が3名あった。理論部門所員の人事が進行中である。伊藤氏（中性子）が山梨大に転出する。
 - 予算・設備 平成6年にスーパーコンピュータを導入し、来年1月から稼動する予定である。東海村の研究員宿泊設備は9月頃から使用できる。平成7年度の概算要求としては、柏キャンパスへの移転を前提とした全面改組計画、液化器更新を要求する。
 - 改組計画に関する冊子が6月に出来あがった。内容は前とほとんど同様であるが、組織の形態を変えた。すなわち、8部門を部門を4大部門に再編成した。大部門の内部の分野変更は、学内措置だけでやれるので、概算要求を伴わないですむ。
- （問）物理学史教育資料の保管場所は確保されているか。
- （答）物性情報センターの中にスペースを作る。

3. 基礎物理学研究所報告（長岡）

- 建物 埋蔵文化財調査が終わり来月末から建設を開始する。来年6月に竣工し、宇治との合流が実現する。なお、古い建物は残り、湯川記念館として保存する方針である。
- 設備の充実 コンピュータ（レンタル料2億円／年）を平成7年度概算要求1位で要求する。事務再編による他に職員1名増を要求する。部門増の要求は平成6年には認められなかったが、今後も要求を続ける。時限付き部門増は避けたいので、大部門化（3～4大部門）をはかり、時限をなくすという方法で2部門の純増をはかり、平成8年度には実現したい。

4. 物性グループ（長岡）

物研連と同じ任期なので、このたび新選挙方法により100人委員（定員365人）の選出をおわり、100人委員の投票により物性委員20名を選出した。有効票214票であった。上位7～8人を物研連委員として推薦する。

〔議事〕

1. 物性研究拠点整備計画（長岡）

- 九州の年会で検討会を開いたところ、50名の参加を得た。批判がかなりあったので、改訂案を各大学に再配布した。多くの反響があり、あらためて、WGの委員（安岡、家、深井、小松原）と共に再執筆した。したがって、前回案からかなり大幅な変更を加えた。

- あらたに強調した点は、物性研究では、個々の研究者の創意・工夫が重要であり、そのためには基盤全体のレベルアップが必要なのであって、中型設備のレベルアップはその補助と位置づけるということであった。
- 中型設備について個々の大学名を挙げるのは計画をされていて名前が挙げられていないグループにとってマイナスとなる場合もあるという批判もあり、中型設備に重点をおき、大学名は削除した。全体の予算規模は5年間で300億円程度とした。さらに、改訂案に対する意見として、後継者養成の視点を加えるべきである。小型設備は順番に整備するという点を強調しない方がよい、物性評価施設は各大学におくべきで物性研の名を挙げて強調すべきでない、などの意見もあり、それらを取り入れた。

以上の報告に基づき議論に移った。

- Q：大学名は落としてあるのに予算規模の根拠があるか。
A：ベースになる論理はある。
- 大学名を落としたために生々しさが消え、具体的インパクトが弱くなった。補強する方策はないものだろうか。
- 物性研設立当時は、物理と化学が共存していたのに、この文案には化学分野に対する目配りが不足していないか。
- 化学、素粒子、原子核に対して物性物理としての団結を示す必要があるのではないか。
- 人の流れについての視点が欠けている。
- これを文部省が取り上げたときに備えて、各大学で内部資料を用意しておくことが重要だ。
- 基盤整備費の基礎として科研費で調査した東大理学部長の膨大な資料はある。
- 具体名が欠けたために概算要求としては後退した形になっている。
- 具体的に概算要求を出すときに、この計画に沿っていることを明記して出せるだろうか。
- 大学としての概算要求の枠組からは別のものとして出す必要がある。
- これを具体的に概算要求するときの唯一の可能な方法は物性研からの要求として出すことである。
- 新しい方式の研究所あるいは研究組織としての位置づけが必要である。
- 実現の方策について危惧の念が多かったが、これについては文部省との交渉過程で考えて行く。

以上の議論の後、今後の取扱いについて

1. 明日の物研連の了承の下に、対外報告書として出していく

2. 次期へ引き継ぐ

3. 物性研便り、物性事務局報として半公開することにより今期としての報告を
まとめて、対外報告書としては次期に引き継ぐ

の3つの方法を検討し、第3案で進めることにした。その際、実現への方策も十分
次期に議論してもらうことを期待したいという意見が出た。

2. 大型設備計画（石井）

将来計画を含む報告書を執筆中である。放射光については石井が、中性子については
遠藤が作業を進めている、という報告に続き、次のような議論があった。

○Q：中性子は高エネルギー研究所での充実を期待するのか。

A：どこでもよいが直轄研が望ましい。

○放射光についてはPFRINGの高輝度化が完成した後にも役割分担をして使うことにな
ろう。

○TRISTAN用アキュムレータの放射光利用も議論したい。

3. 物性研協議会委員選挙

任期は平成6年9月1日～平成8年9月1日で任期開始時に60才以下である者を選
出する、という方針のもとに無記名投票を行い、次の5名を選出した。翌日の物研連
本会議に提案し、承認された。

斯波 弘行，川村 清，遠藤 康夫，張 紀久夫，興地 斐男

以上

掲 示 板

「修士論文」募集

例年、本誌では、各大学の物性分野の修士課程修了者の研究内容を紹介しています。本年も1994度の修士論文を募集したいと思います。学術的に価値の高いもの、研究内容がユニークで面白いもののほか、研究は完成していないが今後に興味ある問題提起を含むものや、Review 的な力作など、特色のある修士論文を投稿して下さい。

1. 募集締切：1995年3月末日
2. 自薦、他薦は問いません。また、教室の推薦を歓迎します。
3. 論文のコピーを2部お送り下さい。

紙数の許す限り掲載したいと思いますが、掲載の可否については編集委員会にご一任下さい。但し、掲載が決定した論文については、次のような対応を取らせていただきます。

1. 原則として、英文の修士論文は日本語に訳していただきます。
2. 枚数の多いものは、簡潔な内容に縮めていただく場合や、写真印刷の都合上、体裁を整えていただく場合があります。
3. 掲載された論文の著者には別刷50部、無料で差し上げます。

「講義ノート」募集

本誌では、大学院特別講義の「講義ノート」を随時、受け付けています。これまで一部の大学に限られていましたが、枠を広げ全国の大学で行われる、物性関係の興味ある講義のノートを掲載したいと思います。つきましては、関係各位の方々に講義ノートの作成について御尽力をお願いします。

通常、大学院生にノートをとっていただき、講師のチェックの後、掲載しています。講師には別刷50部を寄贈し、ノート作成者には薄謝と別刷20部程度を差し上げています。講師の了解などはこちらで交渉致します。また、退官記念講演なども、歓迎します。内容と記録の可能性を考慮して、推薦もしくは投稿下さるようお願いいたします。

科研費総合研究・一般研究の 報告書の転載について

「物性研究」では、科研費総合研究及び一般研究の報告書を本誌に転載したいと思います。研究成果報告として、立派な報告書が作成されても、限られた部数が関係者のみに配布される状況では、誰もが手軽に見ることが出来ません。また、そういった形の報告書は四散して失われる危険も大きく、本誌のような定期刊行物に掲載されれば、公開、保存のいずれにおいても意味があります。つきましては、ご投稿あるいはご推薦下さいますようお願いいたします。

既に印刷済みの報告書 2部を、転載を希望される部分を明示の上、お送り下さい。別刷はお渡ししないことになっておりますが、もし希望の場合は、部数をご連絡下さい。詳細は、下記までお問い合わせ下さい。

〒606-01

京都市左京区北白川追分町

京都大学 湯川記念館内

物性研究刊行会

TEL. (075)753-7051, 722-3540

FAX. (075)722-6339

編集後記

基礎物理学研究所の印象といえば、なんといっても幽霊屋敷もどきの古めかしい建物であろう。物理の深遠さを象徴するような怪しい風体である。建物の古さに加え、研究所をとりまいている植物園が何とも言えない雰囲気醸し出している。もちろんここに集う研究者も、たいへん怪しい感じで、建物とぴったりマッチしている。このようなパラダイスも老朽化が深刻となり、私の部屋の向こうでは新しい基研の建物がどんどん出来つつある（95年夏完成予定）。近代的な建物で研究できることはたいへん喜ばしいが、いざ離れるとなると、この古めかしい館に何とも言えない愛しさをおぼえる。基研を利用されている方々の多くも、この怪しい雰囲気に愛着を抱いておられるのではないだろうか。ぎしぎしとなる階段、雨漏り、真冬のすきま風.... 幸いなことに、新しい建物が完成した後も、この愛すべきパラダイスは残され、これからも物理の発展を見守って行くようである。

(N. K.)

物性研究 第63巻第3号（平成6年12月号） 1994年12月20日発行

発行人 村瀬雅俊 〒606-01 京都市左京区北白川追分町
京都大学湯川記念館内

印刷所 昭和堂印刷所 〒606 京都市百万辺交叉点上ル東側
TEL(075) 721-4541~3

発行所 物性研究刊行会 〒606-01 京都市左京区北白川追分町
京都大学湯川記念館内

年額 19,200円

編集後記

基礎物理学研究所の印象といえば、なんといっても幽霊屋敷もどきの古めかしい建物であろう。物理の深遠さを象徴するような怪しい風体である。建物の古さに加え、研究所をとりまいている植物園が何とも言えない雰囲気醸し出している。もちろんここに集う研究者も、たいへん怪しい感じで、建物とぴったりマッチしている。このようなパラダイスも老朽化が深刻となり、私の部屋の向こうでは新しい基研の建物がどんどん出来つつある（95年夏完成予定）。近代的な建物で研究できることはたいへん喜ばしいが、いざ離れるとなると、この古めかしい館に何とも言えない愛しさをおぼえる。基研を利用されている方々の多くも、この怪しい雰囲気に愛着を抱いておられるのではないだろうか。ぎしぎしとなる階段、雨漏り、真冬のすきま風.... 幸いなことに、新しい建物が完成した後も、この愛すべきパラダイスは残され、これからも物理の発展を見守って行くようである。

(N. K.)

物性研究 第63巻第3号（平成6年12月号） 1994年12月20日発行

発行人 村瀬雅俊 〒606-01 京都市左京区北白川追分町
京都大学湯川記念館内

印刷所 昭和堂印刷所 〒606 京都市百万辺交叉点上ル東側
TEL(075) 721-4541~3

発行所 物性研究刊行会 〒606-01 京都市左京区北白川追分町
京都大学湯川記念館内

年額 19,200円

会員規定

個人会員

1. 会費：

当会の会費は前納制になっています。したがって、3月末までに次年度分の会費をお支払い下さい。

年会費	1st Volume (4月号～9月号)	4,800円
	2nd Volume (10月号～3月号)	4,800円
		計 9,600円

お支払いは、郵便振替でお願いします。当会専用の振替用紙がありますので、下記までご請求下さい。郵便局の用紙でも結構です。通信欄に送金内容を必ず明記して下さい。

郵便振替口座 京都 01010-6-5312

2. 送本中止の場合：

送本の中止は Volume の切れ目しかできません。次の Volume より送本中止を希望される場合、できるだけ早めに「退会届」を送付して下さい。中止の連絡のない限り、送本は継続されますのでご注意ください。

3. 送本先変更の場合：

住所、勤務先の変更などにより、送本先が変わる場合は、必ず送本先変更届を送付して下さい。

4. 会費滞納の場合：

正当な理由なく 2 Volumes 以上の会費を滞納された場合は、送本を停止することがありますので、ご留意下さい。

機関会員

1. 会費：

学校、研究所等の入会、及び個人でも公費払いのときは機関会員とみなし、**年会費 19,200円** (1 Volume 9,600円) です。学校、研究所の会費の支払いは、後払いでも結構です。申し込み時に、支払いに書類(請求、見積、納品書)が各何通必要かをお知らせ下さい。当会の請求書類で支払いができない場合は、貴校、貴研究所の請求書類をご送付下さい。

2. 送本中止の場合：

送本の中止は Volume の切れ目しかできません。次の Volume より送本中止を希望される場合、できるだけ早めにご連絡下さい。中止の連絡のない限り、送本は継続されますのでご注意ください。

雑誌未着の場合：発行日より6ヶ月以内に当会までご連絡下さい。

物性研究刊行会

〒606-01 京都市左京区北白川追分町 京都大学湯川記念館内
電話 (075)722-3540, 753-7051
FAX (075)722-6339

物性研究 63-3 (12月号) 目次

○化学反応の統計理論とカオス.....	染田 清彦.....	271
○研究会報告		
「超低温物理の現状と将来の展望」.....		291
○議事録		
第8回物性専門委員会(第15期)議事録.....		379
第9回物性専門委員会(第15期)議事録.....		384
○掲示板.....		388
○編集後記.....		390

物 性 研 究 63-3 (12月号) 目 次

- 化学反応の統計理論とカオス……………染田 清彦………… 271
- 研究会報告
「超低温物理の現状と将来の展望」…………… 291
- 議事録
第8回物性専門委員会(第15期)議事録…………… 379
- 第9回物性専門委員会(第15期)議事録…………… 384
- 掲示板…………… 388
- 編集後記…………… 390